



伊藤忠遊全集

第二卷

昭和五年四月十八日印刷
昭和五年四月二十二日發行

伊藤痴遊全集 第二卷

著者 伊藤 仁太郎

發行者 下中彌三郎

東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川 薫

東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番

株式會社 平

凡社

電話九段 三三一
六四六
四七六
七五四
電報工

第二卷 西郷南洲

後篇 目次

官軍東下と桑名開城(一一六)	三
慶喜の歸來と勝安房(一一三)	一九
和戰の會議と勝の立場(一一六)	三〇
幕兵の動搖と勝の苦心(一一二)	四四
幕使山岡鐵太郎と西郷參謀(一一三)	四九
江戸開城と兩雄の會見(一一六)	八〇
江戸開城と慶喜の立退(一一八)	二九
脱兵の奮闘及徳川家處分(一一六)	一四〇
新撰組の事(一一七)	一五三

彰義隊の起因並怪僧義觀(一一七)	一七五
彰義隊の分裂と解散の命令(一一六)	一九二
大村益次郎と彰義隊討伐(一一八)	二〇五
大村の智謀、上野の陥落(一一四)	二四五
彰義隊の潰滅と法親王の立退(一一一)	二七八
最初の征韓論と大村益二郎の死(一一四)	三二〇
西郷の進退と廢藩置縣の顛末(一一二)	三三〇
宮中政策と兵制の更新(一二二)	三四六
岩倉大使の洋行(一一三)	三五二
薩長の軋轢と樺太問題(一一〇)	三五九
征韓論の内容と不平黨の陰謀(一一六)	三八三
修交使派遣論と岩倉一行の歸朝(一一四)	三九六

岩倉の苦肉策と大西郷の憤怒(一一五)……………	四七
大久保の辭職と三條相國の卒倒(一一五)……………	四九
五參議の辭職と西郷の歸國(一一〇)……………	五一

西
鄉
南
洲

後
篇

官軍東下と桑名開城

一

伏見鳥羽の戦ひが終つて、征討軍の東下は、軍用金の徴發や、兵士の召集に、在外の日時を費し、それから東海道を、順次に進んで來るのであるから、江戸へ着く迄には、可成りの日を要する事は、幕府側にも、よく判つて居た筈であるが、若し其間に、充分の戦備を整へ、官軍の鎮撫使に先立ち、沿道の諸侯を、上手に動かしたら、官軍は、非常に苦んだに違ひない。その事が行はれなかつたのは、官軍の爲に、頗る好都合であつた。同時に、幕府側の不利になつた事は、官軍をして、容易に進ましめた、といふ點にあるのだ。

併し、幕府側には、主戰論と、非戰論の二派があつて、内部の統一が取れなかつた事も、官軍の爲めには、此上もない幸福であつた。

東海道筋の官軍は、薩長の二藩を主として、紀州、因州、備前、大村、細川、越前、藤堂、其他、各藩の兵士を集めて、約一萬人であつた。征討總督は、有栖川宮殿下であるが、大參謀は、西郷吉之助であつた。その先鋒は、鎮撫總督として、橋本少將寶梁卿が、これに任せられ、副總督は、柳原侍從前光卿である。參謀として従ふたものは、海江田武次、木梨清一郎の兩人であるが、大村と佐土原の二藩から、選抜した兵士が、従いて居るのであつた。

肥前大村の藩主、大村丹後守は、その知行から言へば、僅かに二萬七千石だが、長州藩と相通じて、幾度か、幕府

の壓迫に堪へ、漸く此に至つたのである。藩士としては、渡邊清左衛門と、その弟の昇、楠本平之丞（正隆）重臣の大村一學、まづ此四人が、維新の事業に、參加して居たのだ、伏見鳥羽の戦争には、大津口の堅めを引受けて渡邊兄弟の名は、一時に高くなつて來た。西郷が未だ京都に居るうちに、先鋒隊として進發したのであつたが、二月二十日には、伊勢の四日市まで來て、此處で、暫時、休息する事になつた。

藩論は、初め佐幕と倒幕に分れて、可成り激しい争ひであるが、これが爲に、松林飯山は殺されたが、渡邊昇の一派が、その跡を引受けて、倒幕派を押し付け、藩論の方針を、倒幕に變へさせたのは、大なる手柄といふ可く、延いては渡邊兄弟の出世ともなり、藩主は、小さい大名であり乍ら、伯爵の肩書を得るやうにもなつたのである。

渡邊昇は、齋藤彌九郎の門人で、劍客としては、有名であつた。熟頭の桂小五郎と、深く交つた關係から、渡邊の働きて、長州藩との握手となり、渡邊は桂の配下として、明治になつてからも、長州閥の政治家として、多く知られたほどであつた。

西郷から、使者が來た、といふので、海江田が面會すると、密書を差出した。見れば、西郷の私書であるが、『桑名城内では、既に糧食の缺乏を、告げて居るのは、必然である。加之に、藩主松平越中守は、慶喜と共に、江戸に在るのだから、城内の士氣も、大に衰へて居るに違ひない。従つて、戦はずして降服させ得ると、考へるが、この工夫をいたせ』

と、いふ意味が書いてあつた。

松平越中守は、徳川家の親藩であつた。例の白河樂翁の後繼であるから、宗家と、進退を同一にしたのは、武士道と人情の、本筋を歩んだもので、假し朝敵の名を得たにもせよ、武門の人としては、實に感ず可きの至りである。伏見鳥羽の一戦に、跪くも敗れ、慶喜に従いて、江戸へ引上げたが、桑名城内に残るものは、留守居の兵士に過ぎず、世子の萬之助は、未だ十三歳になつたばかりだ。如何に利口との噂さはあつても、未だ子供のことであるから、

伏見鳥羽の敗報が来た時は、家臣の驚きも尋常でなかつた。豈夫に、城を棄て逃げることもならぬから、頻に相談の會合は重ねたが、老臣や重役のうちに、大して傑れたものが居なかつたので、小田原評定に、日を送るうちに、いよいよ征討軍の東下と聞いて、止むを得ず、籠城と決した。

只だ、藩主の越中守が、江戸から立歸へる事を、唯一の頼みとして居たが、これとても、左様決まつて居るのではないから、萬一歸つて來られなかつた時は、何としたものであらうか、といふ心配を有つて、籠城して居るのだから城外、幾里の地に、兵を構へて、勝敗を爭ふ杯と男子らしい事の、出来る筈はなかつた。

西郷は、この内情を見抜いて居たから、海江田へ、斯うした註文をして來たのだ。海江田も、參謀と謂はれて居る以上、この註文を受けて、何の工夫もつかない、とあつては、參謀の肩書に對しても、まことに耻かしい次第であるから、頻りに智慧袋を絞つて、漸くに案じ出した、一策といふは、

『先づ流言の策で、士氣を挫き探偵を放つて、城内の状況を搜り、更に辯舌に巧みなものを遣つて、老臣や重役を説きつける』

といふやうなことで、之れより外には、大した策略もないのだから、兎に角、之れに就て、海江田は、努力して見る事に定めた。

四日市まで來て、進軍を中止し、幾日かを過すやうになつたのは、桑名の動靜が、よく判らなかつた爲めである。それにしても、餘りに悠長である、といつて、從軍者のうちでは、可成り不平の聲が、高くなつて來た。

佐土原の富田猛太郎は、海江田參謀を、責める覺悟で、本陣へ、乘込んで來た。

二

海江田武次は、元の有村俊齋である、後には信義と稱して、樞密院顧問官になつて、疾くに世を逝つたが、東郷

夫人の父である。苟も、参謀の肩書ある以上は、何とかして、桑名城を、戦争の力に待たず、謀略の上から、降伏させ度い、と思つて居たところへ、西郷からの來書で充分の見込みはあるらしいが、差當つての良策も浮ばず、困り切つて居る所へ、土佐原兵隊長の富田猛太郎が來たので、面會をすると、富田は、

『眼前に、桑名城を見て、何故に攻めぬのか。かうして日を送るうちには、敵に充分の防禦準備をなさしめ、却て、味方の兵士には、情氣が生じて、非常な不利益になるが、全體、何とする覺悟か』

と、非常な勢ひで、詰問するのであつた。海江田は、答辭に窮して、今は止むなく、西郷から、密使のあつたことを語り、それについて、自分の考へた事も、打明けてしまつた。之れを聞くと富田は、手を拍つて喜んだ。

『それについては、良いことが御座るぞ。拙者の部下に、高橋右門と申すものがあつて、人物も堅實なものの故、之れを利用ことに致しては、如何で御座るか』

『高橋を、どういふ事に使へ、といはれるのか』

『城内へ、送り込んで、一と働き爲せやう、と思ふのぢや』

『その適任者である、いふのか』

『拙者を信じて下さい。たしかに巧くまるゐる、と思ふ』

『城内に知るものでもあるのか』

『それはある』

『御引受け下さるか』

『引受け申す』

『可し、御任せいたさう』

『併し、一度は逢つて見たい』

『宜しい。すぐに呼びにやらう』

高橋右門は、遣つて來た。

抑も、この右門とは、如何なる人か、それを簡単に、紹介して置き度い。

右門は、初め青蓮院宮家に事へた侍であつたが、當時、桑名藩士が、禁闕守護の任を、蒙つて居た所から、知人も、桑名藩に多かつた。然るに、その時分は、尊王攘夷の説が盛んで、右門も、宮様附の侍として、頻りに尊攘の論を唱へ、果は、倒幕の意見を有つやうになり、各方面の浪士とも交つて、やうやく人に知られたが、それが原因になつて、終に獄へ投ぜられた。

右門は、捕まつた時から、首の無いのは覺悟であつたが、この儘まに、空しく殺されるのも、莫迦らしい事だ、と考へて、終に破獄の計畫をして、雨風のはげしい晩に、その目的を達し、遠く九州の奥ふかく、佐土原まで、遁れて來た。元來が、土佐原の生れて、夙く京都へ、出て居たのだから、つまり故郷へ、歸つたやうなものであつた。

一日のこと、用達の途中で、圖らずも邂逅つたのが、富田猛太郎であつた。京都詰の時分に、幾度も逢ふて、懇意にもして居たのだ。それから富田の邸へ引取られて心易く、日を送つて居ると、何時しか、之れが評判になつた。藩の重役に、佐幕派のものがあつて、幕府から、後日の咎めあるを怖れ、富田に、嚴命を下した。右門を突出させやうとした。富田は、頻りに之れを拒んで、事は、漸く面倒にならう、としたが、右門に、假令一時でも、救ふて呉れた、恩人の富田に、累を及ぼしては相濟まぬ、と考へて、自分から、名乗つて出た。其處で、重役が、相談の結果、右門に、切腹させる、といふ事に決した。

土佐原は、薩藩の支藩であつて、藩主は、島津の一族である。それ等の關係から、本藩のものは、常に往來して居た。偶ま、西郷が、藩用を帯びて、土佐原へ、來たのを聞いて、富田が、訪ねて來て、右門の事を話したので、西

郷は、重役へ、一應の忠告を與へ、それから、藩主にも謁して、右門の助命を、嘆願に及んだ。他ならぬ西郷の盡力とて、左しも至難かしかった、右門の生命も、終に救はれる事になつて、右門は、富田の親切と、西郷の恩義に感じた。

それから、今度の從軍となつたのであるから、富田の爲めにも、西郷の爲めにも、身を挺して働かねばならぬのが、國を出る時から、右門の覺悟であつた。

右門が、海江田の前へ来る迄に、富田からも右門の經歷は、話して置いたので海江田は、右門が來るとすぐに、次第を打明けて、桑名藩へ對し、降服を勧める、何とか手懸りはなからうか、と、相談をしたのであつた。

『左様いふ次第なら、一工夫致して見ませう。何卒御任せ下さい』

『見込みはあらうか』

『充分御座ります』

『然らば、何分共に、頼み入る』

右門は、その夜ふらりと、陣所を出かけた。

二

曉蛤で、評判の高い、桑名の城下、ますやといふ、旅宿へ泊つた、一人の旅商人がある。無論、有福とは思へないが、左迄に見苦しくない、町人であつた。

『婢さんや、鳥渡來て下さい』

廊下を通る、下婢を、呼び止めた。

『何ぞ、御用で御座いますか』

『少し使者を、頼み度いが、帳場の人を、呼んで下さい』

『ハイ〜』

下婢は、重返事で、行つて仕舞つた。しばらくすると、番頭らしい男が、ヒヨコ〜頭を下げながら、はいつて来た。

『エー、お疲れさまで、ヘツ、へ、、、』

『おう、番頭さんか』

『ハイ〜、何ぞ御用で御座いますか』

『御城内まで、使ひを頼み度いが、他のものでは困るのだが、お前さん、行つて呉れませんか』

『ハイ……』

番頭は、時節柄であるから、城内の使と聞いて、少し考へて居る。

『大切な用事だから、他のものでは不可ないのだ』

『へ、へ〜』

『この城内に、中村嘉太夫と、増山彦助といふ御方が居るのを、お前さん、知つてゐるかね』

『増山様といふ御方は、一向に存じませんが、中村様には、折節お目にかゝります。まことに温和な、善い御方で御座います』

『然らば、中村さんの屋敷まで、書面を頼み度い』

『へい〜、宜しう御座います。それでは御手紙を、お届けする丈の事で、宜しいので御座いますか』
『左様ですよ』

『それ丈の事なら、まゐりませう』

『それでは、之れを届けて下さい』

懷裡を搜つて、幾何かの金を、紙に包んで、手紙と共に、番頭の前へ出した。

『これは、まことに些少だが、ほんの志であるから、探つて置いて下さい』

番頭も、何だか變な人だ、とは思つた。言葉が丁寧になつたり、横柄になつたり、時々、武士らしい所もあるかといつて、町人のやうでもある。時節柄だから、何か仔細があるのだらう、と、薄氣味は悪いが、厭だとも云へなかつた。紙包の效能も、いくらあつて、番頭は、手紙の使ひを、引受けた。

『この御返事は、どういふ事になりますでせうか』

『待つて居て、返辭を聞いて來て呉れ』

『へい／＼』

『何分、頼む』

之れから番頭は、城内へ出かけた。

後には、獨り薄暗い、行燈の蔭に、旅商人は脇枕をして、横になり乍ら、使ひの歸りを、待ち受けた。この旅客の何者であるかといふ事は、改めていふ迄もないが、桑名城を、三寸の舌頭で降さう、といふ、大任を負ふて、高橋右門が、變装して、來たのであつた。

何時眠るともなく、鼾の聲が爲るやうになつた。少焉すると、

『エー、お客様へ、もし旦那……』

右門は呼起されて、靜かに起上つた。

『おう、番頭か』

『へい、只今歸りました』

『恰好、中村様が、御在邸で御座いますして、御手紙を御覽になりますと、吃驚なさつたやうで御座いました』

『うむ、そりや、左様であつたらう』

『しばらく御考へ遊ばして、おいでゝしたが、宜しい承知した。別に御返書は差上げないが、後から直に行くから、宜しう申上げて呉れ、と、斯う仰しやいました』

『左様であつたか、可し／＼』

『それでは、御免蒙ります』

『下婢にいふて、茶や菓子準備を、して置いて呉れ』

『へい／＼』

右門は、笑聲に入つて、兩人が来るのを、今や遅しと、待受けた。

自分の考へでは、何となく目的通り、事が運びさうな、心が爲る。尤も、之れを失敗つては、生きて歸へれぬ位の覺悟は、右門に於ても、固より在つたのであるから、充分の見込がなくて、輕々しく引受ける筈はなかつた。兎に角、非常な覺悟で、待ち受けて居る。所へ、兩人が來た、と、下婢が、知せて來た。

四

中村嘉太夫は、右門からの手紙を見て、一たびは驚いた。逢ふて可いか、逢ふて悪いか、再三、考へた後ちに、取敢へず逢つて見ようといふ氣になつた。その手紙には、絶えて、久しく逢はないから、是非一度逢ふて、昔話をしたい、といふ丈けの事が、書いてあつたのだ。時節柄でもあるから、多少の事情があつて、來たのだらう、とは思つたが、兎に角、逢つて見よう、といふ氣に、なつたのである。其處で、増山彦助を誘つて右門の旅宿、ますや方へ來た。